



TITLE:

北樺太シユミツド[半]島探検記(上)

AUTHOR(S):

槇山, 次郎

CITATION:

槇山, 次郎. 北樺太シユミツド[半]島探検記(上). 地球 1924, 1(1): 73-81

ISSUE DATE:

1924-02-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182626>

RIGHT:

北樺太シユミツド半島探檢記 (上)

槇 山 次 郎

急にシユミツド半島の地質を調査する計畫が成て山崎直樹氏と共に小樽を七月二日(大正十二年)に出帆する花咲丸に便乗した。船は直路北に走つて翌日の朝海馬島の東を通過し眞岡の沖を樺太の西岸に並行して進んだ。樺太の沿岸には美事な海岸段丘が發達してゐるのが望見せられた。四日野田寒沖にかかつてても陸の地形は昨日見たのどよく似てゐて單調であつた。五十度の國境は船長に注意されてやうやく判別した。林空は大分不明になつたさうだ。北樺太が日本領になる前兆かも知れない。北樺太の海岸は稍趣が變つて來た。可なり高い山が海岸近くあつて少しも平地が見えない。南には所々にあつた漁場も稀になつて非常に淋しい、海上には海豚やオットセイが泳いでゐた。船は夕刻アレキサンドロスク即ち所謂亞港に投錨した。

亞港は北樺太唯一の都會であるが人口は四千に滿たぬ。大小アレキサンデル川の二つが會して海に注ぐ所で小平原があるから稍植民に適した事附近にドウエやムガツチの炭坑がある事によつて開けた。山ノ手と下町とあつて山ノ手は舊市街で露人町である。下町は新市街で最近の日本移住民の

町である山ノ手には日本陸海軍の兵舎軍政部の官舎もある。日本人は最多いが常に出入があつて人口が不定である。眞面目の營業者もあるが一時的の暴利を貪る者が多い。いかがほしい商賣が勢力あつて天草女が第一線に立つて居る事は滿洲南洋と同様である。露國人の住宅が堅固な防寒設備の充分なものであるのに日本町は東京のバラック町と同じ事で肩身が狭い。亞港には支那人朝鮮人の勞働者も少くない。港としての亞港は甚不利で僅かに東南の風を防ぐのみであるから少し波が出たらば船は錨を捲いて逃げ出してしまふ。

我々の目的地はまだまだ遠いのであるが亞港より北には尼港に行く宗像丸の外便船がない。といつて同じ樺太島だからとて陸路をとる事は到底出来ない、何故ならば全島は千古の密林に被はれて道通せず海岸や平原は恐るべき濕地で歩行困難だからである。間宮海峽は冬期全く凍結して對岸大陸との交通は容易となり赤露の侵入の恐れあるので軍當局は常に注意を怠らないのであつて、其守備隊のあるポコビーまでは一寸考へると亞港から海岸傳ひに行けそうに思へるが夏期は身體がすっかり没してしまふほどの沼地があつて通過できない。無理に行つて死んだ人もあるそうである。

また中央低地帯のツイミ河を船で下つて石油地のヌイウオまでは道も驛舎も開けて居るが最北の石油地たるオハまでになると殆んどツンドラを横斷し續けて行かねばならないから我々の様に數ヶ月分の食糧を携へては困難である。そこでどうしても海路を直接北端の目的地まで行かねば他に方

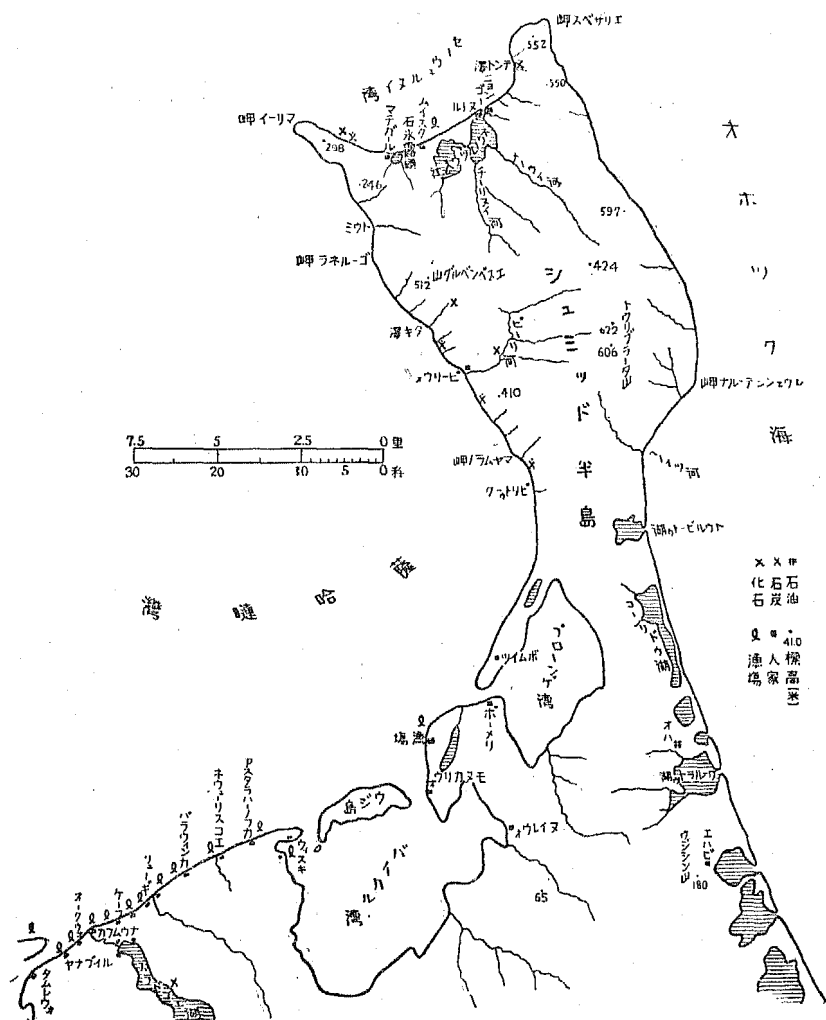
法はない。幸に一行は軍政部の漁業調査船に便乗が許されたのであつた。

七月六日午後十二時に我々を乗せた百六十噸の發動機船は亞港をたつた。翌七日期、船はいよいよ間宮海峡にかかった。此處から黒龍江河口までは黒龍水道と稱し海は非常に浅いので唯一本の航路の他は座礁の恐れがある。毎年六月に我海軍がブイを下し十月中には引上げる。船はブイからブイをたどつて危い航海をするので少し波が高ければ靜まる迄動く事は出来ない。三時頃ボコビーに着いた。此處は海峡の最狭い場所であつた。僅か二哩だといふので國防上重要な地點となつてゐるから守備隊が置かれてゐる。對岸には赤露の守備隊が居るといふ事であつた。隊の他には魚場があつて夏期中日本人が出稼に來てゐるだけで何も無い。

八日は稍波高く浮標が見えないので其ままボコビーに滯泊した。

九日浮標を數へながら徐々に前進した。船員は總係りで或者はマストに登りて浮標を監視し或者は水深を測り或は磁針の調整に忙しうである。晝すぎ尼港航路から分れて北水道に入つた。黒龍口の淡水の量が大なる故此邊の海はすつかり鹽氣がない。船員は急ぎ洗濯をし更に用水を汲んだ。今夜から此水で御飯を頂く事になる。

無事水道を通過して日没頃タムレウオ沖からオホツク海に浮び出た。此邊の海上には無數の白鯨が遊泳して壯觀であつた。此夜船は大變にゆれた。



十日の朝甲板へ出て見るといよいよ目的地のシュミツド半島が右に見えてゐた。船はセーウエルヌイ灣に入つてゐたのであつた。

我々はムイスクに上陸した。此處は漁場で函館の三浦氏が經營してをられた。漁場で空いた小屋に入り人夫は別に天幕を立てた。調査は七月中此處を根據として所々に前進幕營地を設けなどして行はれた。シュミツド半島は西洋盃^{カップ}状をして二本の角が生えた様な形をしてゐる。盃の主軸は北から僅か西に倚つてゐる。東の角の先端をエリザベス岬と稱し西の角の先端をマリイ岬と稱する。兩岬に抱かれた灣をセーウエルヌイ灣と曰ふ。灣の沿岸にはムイスクの漁場ヌールのギリヤツク部落の二ヶ所に人家があるばかりである。シュミツド半島には二本の山脈がある。各東西兩海岸に近く並行して走る。東山脈はエリザベス岬に起り平均五百米の高度を保ち南走しレウエンシテールナ岬に終る。最高峰を三人兄弟山（トウリブラータ山）と稱し六百二十二米ある。西山脈はマリイ岬に始まり走向略々東山脈に平行してマヤムラフ岬に没する。概して低く中央部にあるエスペンベルグが五百十二米を算するばかりである。兩山脈に夾まれて中央低丘地帯がある。半島の中央部に東西に走る分水界があつて此地帯の斜面を南北に兩分してゐる。北なる水は或はナーウイ川となり、或はチーリスイ川となりネワルツの入江に注ぎ更にセーウエルヌイ灣に流れ出る。

南なる水は一旦南下するが直ちに西に折れて西山脈を横斷して薩哈連灣に注ぐ、之をビーリ川と

曰ふ。ピーリとはギリヤツク語で大といふ義である。半島として大川であるが甚小さい川である。此等の河川の流域も原始状態そのままであつてピーリ川口に一戸のギリヤツク族がゐて漁業をしてゐる他何もない。此處をピーリウオと呼んでゐる。西海岸にはピーリウオの北にトウミがあつてギリヤツク族が二戸住んでゐた。東海岸は全然無人の境である。半島の根部は低平な丘陵地で本島に連なつてゐる。

北半の地質調査を終つてから八月十日に再び漁業調査船によつて根據地をピーリゾオに移した。西部中央部の調査は此根據地によつて九月の引上げまでの間に續いたが終に東南部に足を運ぶ機を失つた。東山脈は中生代のエリザベス層よりなる褶曲である。エリザベス層は下部は主に緑色の砂岩で上部は黒色頁岩である。黒色頁岩の内からイノセラムスを得た。山脈の中軸には蛇紋岩がエリザベス層を貫いて廣く分布してゐる。

東山脈の大部は峻烈なる氣候の爲に樹木の成育に適しない。で、恰度高山の灌木帯以上に相當する状態を示してゐる。エリザベス岬の五百五十二米高地附近は最高山性の地形を呈してゐる。岩石は氷霜作用によつて破碎して岩屑は崩壊して山架を形成する様日本アルプスの二千八百米以上の山地と全く等しい。草本帯の高山植物が其間に咲き亂れて七月初旬は實に美しかった。主な者はチシマヒナゲシ、チシマギケウ、タカネキスミレ、ハクサンイチゲ、ナンキンコザラ、チシマフウロ、

チングルマなどであつた。岬から南へ行き蛇紋岩地に入れば破屑が細いので所々に安定な地盤が出来植物も数が多い。かかる場所は美事な御花畑になつてゐる。段々と南方に進めば遂に這松の密林に化する。東山脈の風景で面白いのは谷間の細い残雪に近い濕氣の勝つた所にはガンビ（岳樺に類する木）が白い肌を見せてゐて其外側には大きな這松が密生し段々と峯の方に小さくなり一番上は禿げてゐてつまり五つの帯になつて互にボカされてゐる事である。山脈の分水界には残雪の浸蝕作用が小規模に行はれてゐるのを見たが氷河作用の痕跡は見られなかつた。唯二ヶ所ばかりカール不完全なのがあつただけである。東海岸は驚くべき絶壁で通過は頗る困難だ。全く人跡が無くて砂濱の上に印された足跡は熊と狐ばかりである。東山脈の西には南北の斷層があつて中央低丘地帯に面してゐる。斷層の弱線には硫酸鐵の沈澱があつて附近の岩石は激しく硫化してゐる。此から西の低丘は新生代の新層から構成されて上には洪積世の砂利を冠つてゐる。

西山脈は東山脈に比すると山が低いばかりでなく傾斜も緩く樹木がよく繁茂して原始林をなしてゐて唯所々頂上が這松帯となつてゐるばかりである。地質の上から言ふと此山脈には新生代前の岩石がない。一番浸蝕に抵抗力のあつて高い峯をなしてゐるのは多くは玄武岩である。此は恐らく第三紀の最初に噴出して床狀に廣まつたものであるらしく始新世の含炭層に被覆されてゐる。マリー岬の東側には一箇所に漸新世の海成層があつて夥しい貝化石を産する。此化石の仲間はアラスカカ

らオレゴン州に續いて知られてゐてアストリア漸新世層と呼ばれるものゝに等しいやうである。内地では常磐炭田の淺貝砂岩に同様の化石動物群 (Fossil Fauna) が出るから私は此系統を淺貝統と稱したいと思つてゐる。

海成漸新世層は不整合に中新世層に被覆されてゐる。後者は半島内に最廣く分布した第三紀岩であつて海棲の貝化石を藏してゐる。此等の層序論の詳細は更に號を改めて發表するつもりであるから今回は略することにした。

唯特に注意を要する事は此層の最下部をなす泥岩中に花崗岩、結晶質片岩、片麻岩及硬質頁岩等の大塊が包含されてゐることである。それで此泥岩が明かに海成である事は奇である。伊太利のピエモンツの中新世層下部 (アキタニアン期) に同様の例がある事は Sacco により紹介された。北樺太の北部にて右の様な岩石の原露頭は知られてゐない。だから斯様な大塊は遠くから運搬されたものに相異ない。Sacco は氷河作用に疑をかけたが私は少しく考へを進めて氷山の運んだものであるまいかとしてゐる。嘗てオハ石油地帯を探檢した地質家は海岸に轉存する斯様な大岩塊を洪積世の氷河作用に結ばんとしてゐたが偶然今度の旅行で中新世層中から轉落したものである事を確め得た。岩塊の泥岩中にある者は角ばつてゐて周圍の泥土は泥灰岩に化して居る。

中新世層は更に不整合に鮮新世層に被覆されてゐるが後者は半島の南端に露出が見られるばかり

である。

右の他海岸には段丘があつて洪積世の砂利層がある洪積世に特別なのは石氷 (Staines) であらう石氷はシベリアではマンモス氷詰を産んで有名なものであるが樺太に発見されたのは初めてであるムイスクの西方海岸の斷崖に約一杆の間に露出して厚さ十七米あり、稍粘土質を混じてゐる。上には洪積世の砂利層が乗つてゐて明かに其より古い成生である。露頭で解けると上の土砂が崩れ落ちて間もなく隠れてしまふから次の暴風の折に波に洗はれて出るまでは見る事が出来ない。石氷がツンドラ、泥炭地等の凍氷や残雪からいかに變じてゐるか、一目區別がつくものである。

といかに異なり